

# 五山文学に見られるグローバル化の始まり

ヴィート・ウルマン\*

## 1. はじめに

この論文では五山文学におけるグローバル化の誕生に関わる現象について論じる。グローバル化は多岐にわたり議論されうる主題であり、今回は文学の中で感じられるその足跡を探究する。グローバル化を中世日本の文学の中に探すことについて疑問を持たれる方も多いただろうが、その理論的な根拠についても少し論じる。五山文学は13世紀から15世紀にかけて五山制度に所属している寺院の禅僧によって書かれた文学の総称である。五山は都会にある大きな禅宗の寺院であり、その制度は中国から輸入されて、鎌倉時代末期から日本にも存在した。五山は文化のセンターとなり、文学の場としても大きな役割を果たした。五山僧は中国の禅僧と密接に結びついており、五山文学は漢文学であり、特に漢詩が数多く作られた。

## 2. グローバル化とは何ぞや

まず、グローバル化とは何かという問いに答えよう。様々な定義が存在しているが、今回はアンソニー・ギッデンスの定義を例として挙げる。彼の定義によると、グローバル化とは世界中の離れた場所を繋ぐ社会的な関係が激化していく現象である。(Giddens, 1990)しかし、このような定義に基づいて分析すれば、グローバル化は現在の過程を指すだけでなく、古くから同様のプロセス

が存在していたのではないであろうか。

国際貿易や国際交流のような現象はたった今現れたわけではない。中世の東アジアでもそのようなグローバル化を導く現象は著しく発達していた。ヨーロッパにも中東にも、それに東アジアにも国際的な組織が存在していた。特に同じ宗教で結ばれた人々が国境を越えて一つの団体として活躍していた。ヨーロッパではそれはカトリック教会であった。中東ではイスラム教であり、東アジアの場合、それは仏教の様々な宗派であった。中世日本では特に禅僧が国際交流の場で活躍していた。禅僧は漢文を書くことができ、中国語も話せて、教養も優れていたため、国際的な場面では恰好の外交官となりえた。海外との接点が多かった僧侶は外国の影響を強く与えられたに違いない。五山文学は禅僧の文学なので、グローバル化の成果が著しく目立っている。

## 3. グローバル化の第一歩：異文化のマネ

これからは具体的な例を見てみよう。代表的な例として絶海中津、義堂周信、一休宗純の作品を一首ずつ選んだ。

まずは、絶海中津(1334-1405)という禅僧の作品を分析する。絶海中津によって書かれた詩のほとんどが中国を題材にしている。なぜなら、彼の『蕉堅稿』という詩集は中国で書かれた物が収められているからである。日本で書かれた詩はほとんどない。この詩は日本へ帰る直前のものであり、明代の初代の皇帝・洪武帝に謁見した際に作られ

\*カレル大学大学院院生

た作品である。洪武帝はもちろん上位であり、詩の主題を決める権利があった。彼は三山という主題を決めた。

三山は中国の伝説において東方の海にある仙人の山で、日本ではもちろん、特に熊野三山を意味する。絶海中津はこの二つをモチーフとして、一首の漢詩の中で歌った。

応制賦三山  
熊野峰前徐福祠  
満山葉草雨余肥  
只今海上波濤穩  
萬里好風須早歸

制に応じ三山を賦す  
熊野の峰前 徐福の祠  
満山の葉草 雨余に肥ゆ  
只今海上 波濤穩かに  
萬里の好風 須らく早く歸るべし

口語に簡単に翻訳すれば、

「熊野の峰の前には徐福の神社がある。  
満山の葉草は雨のおかげで茂る。  
たった今海では波が穏やかになった。  
辺りはよい風がふき、徐福が帰ればいい。」

となる。

まずは、この詩の要素の背景を明確にしよう。史記で書いてあるように、中国の秦の始皇帝の使いには徐福という者がいた。始皇帝は年を取ると共に徐々に不老薬の搜索に熱心になっていった。始皇帝は徐福に東にある三山を探そう命じた。徐福は数多くの船を用意し、探しに二回出たが、二回目の遠征からはもどってこなかった。熊野にはもちろん、古い神社があり、徐福が探した仙人の山を思い出させるような自然もある。

「須らく早く歸るべし」という部分は徐福が中国に帰ってくればいいという意味ではないだろ

うか。この第四句の目的は恐らく洪武帝への尊敬を表すことであり、それ故に、このような表現になっているのではなかろうか。中国はまた天命が授けられた君主が治めているので、徐福が帰ることができる 때가きたという意味になっているのであろう。もしくは、その裏には、さらに絶海自身の帰国が迫っているという意味が潜んでいるであろう。

さて、この詩では日本と中国の文化の要素が明らかに漢詩の形式に取り組みれ、一体になっている。中国由来の要素（例えば徐福）と日本由来の要素が完全に同様に扱われている。しかし、この詩は中国で書かれた作品であり、中国の皇帝のために作られた詩である。作った詩人が日本人であるにもかかわらず、あくまでも中国的な立場から書いたのではないだろうか。また、実際に日本に関わる部分は第一句だけではないだろうか。つまり、この段階では中国で中国人のために中国様式で書かれた作品になっている。このような例はよく文化の中心地にやってきた人が自分の知恵を表すために、その文化の上流社会の人が作るようなカルチュラル・アーチファクトを複製するという形で見られる。そのような行為の軌跡が日本史上に数多く見られるのではないであろうか。

#### 4. グローバル化の内面化

次は、義堂周信（1325–1388）の詩を例として挙げる。義堂の膨大な『空華集』に収められている七言絶句である。この詩は義堂周信によって大休寺への訪問の際に作られた。そのお寺は足利尊氏の弟、足利直義によって県立され、彼自身のお墓もそこにある。義堂周信が鎌倉公方に行き、そこにお墓参りに行った際に、三首の漢詩を作った。その中の二首目はおそらく一番興味深く、例としてあげようと思う。

その序にはこのように書いてある。「奉左武衛命三詠詩同故令叔大休寺殿」左武衛とは朝廷での

貴族のランクで、兵衛府という天皇や貴族の護衛のための施設の頭の名称である。日本では普通に兵衛督と呼ばれているが、武衛はその唐名である。この左武衛は恐らく足利基氏であろう。足利基氏は鎌倉公方で、かれの叔父は足利直義であった。彼はここにかいてある叔大休寺殿に違わない。この序はもちろん完全に漢文になっている。それは驚くべきことではないが、ランクも名前も全部古典中国語に翻訳されている。

紛紛世事亂如麻

紛紛たる世事 麻の如く乱れて

舊恨新愁只自嗟

舊恨新愁只自ら嗟く

春夢醒來人不見

春の夢醒めて来て人見えず

暮檐雨瀉紫荊花

暮檐 雨紫の荊花に瀉そぐ

口語に翻訳すれば、一応このようになる。

世の中は麻のようにみだれている。

古い恨みと新しい愁いは私だけが嘆く。

春の夢から醒めて来て人が見えない。

夕暮れの檐、雨が紫色のハナズオウの花をひたす。

このハナズオウという花はふるく兄弟が喧嘩をせず、ハナズオウの花のように皆立派になれるということの象徴である。これは間違いない足利尊氏と足利直義への隠喩であろう。彼らの仲は結局うまく行かなかったため、この詩では雨が涙のようにその花を濡らしている。もちろん、ハナズオウの象徴的な意味もハナズオウ自体のように中国から輸入された。ある意味ではこの詩は絶海中津の詩よりグローバル化が一段階進んでいる。この詩を書いた詩人は絶海中津と異なり中国に留学したことがない。一生日本で過ごして、この詩で鎌倉公方のために、鎌倉で生きていた足利直義を歌っている。その詩の内容も一切中国と関係がない。

しかし、その形式、その表現、その序の内容も完全に中国化されている。その序がわからなければ、中国のどこかで中国人の詩人によって書かれた詩だと思ってしまいかねない。義堂周信が完全に中国文化か、少なくとも中国文学を内面化していたという証拠になるのではないだろうか。この場合は漢詩・漢文という文化的な現象が単に中国人のための物ではなくなり、このような改まった場面に適しているという発想を中国人と日本人がともに持ち始めた。つまり、共通の文化の特徴の一つとなった。現代的なものに例えると、由来はアメリカだと皆がわかっているが、世界のどこでも着られているジーパンのように、それほど外国のものだという感じがしないのであろう。

## 5. グローバル化の反対側：地域化と異文化の摂取

中世日本の禅僧、特に五山の禅僧は極めて国際的な環境で活躍していた。彼らはグローバル化の輸入機関そのものであったともいえる。もちろん、中世日本でもそれに反する過程が存在して、同時に地域化も進んでいた。日本と明との関係が悪化してきたころには幕府の力も衰えて、五山も弱体化し、禅僧が留学に行かなくなった。その国際的な禅宗社会の精神も徐々に消えてしまった。しかし、その努力の成果が全部消えたわけではない。彼らもたらした知的な文化は少なくとも部分的に日本文化の中に溶け込んだ。そのグローバル化の頂点の後の地域化の例として一休宗純の漢詩を挙げる。一休宗純は厳密に言えば、五山の僧侶ではなかったが、それ以前の五山文学との比較に役立てると思われる。

脚下紅絲線

持戒爲駙破戒人 持戒は駙と為り破戒は人

河沙異號弄精神 河沙の異号精神を弄ろう

初生孩子婚姻線 初生の孩子婚姻の線

開落紅花幾度春 開落の紅花幾度の春ぞ

口語に翻訳すれば、このようになる：

戒を守ればロバになる、戒を破れば人になる。  
河の沙の粉ほど無数のことについて考えて無駄  
に精神を費やした  
初生の子供、婚姻の線  
赤い花が何回春開いて落ちたか

この紅糸線はキーワードとして扱えばよからう。紅糸線は一休宗純にとって重要なモチーフであり、彼の煩悩の世界への絆を象徴する。一休は当時の寺院の世俗化を批判していたが、彼自身もどれほど仏教を熱心に信仰していても、その戒律を守ることができなかった。彼は性欲を抑えることができず、妓楼へ通い、子供も生まれた。彼はそのようなことについて頻繁に自分の詩で云々している。

一休宗純の漢詩はより宗教的な主題をとり、世俗化を経た絶海中津の漢詩と大きな差を感じさせる。引喩がある場合は殆ど全て仏教的な引喩であり、中国の歴史などには殆ど触れていない。その宗教性及び内面性はその世俗化への反応ではないだろうか。戒律への批判を表しているといっても、あくまでもその仏教的な考え方の枠の中に残っている。中国自体は一休にとって重要ではない。彼が生きていた世界はまた日本の内側に縮んでしまった。残ったのは漢詩の形式と仏教である。

## 結論

中世日本におけるグローバル化の進展について五山文学に着目して明らかにした。絶海中津の詩の場合のように、五山の禅僧は、中国で当時の中国の知識階級のスタイルをまねして、中国文化の要素も日本文化の要素も一つの形式に入れようとしていた。

しかし、その文学的な活動は単に中国人のための物まねにとどまらず、義堂周信の場合のように

あくまで日本的な場面でも完全に中国の漢詩と等しい表現方法が使われたこともある。五山のシステムが退化した後も一定の禅僧が漢詩を書き続けた。一休宗純の場合は中国との関係がほとんど断ち切られ、漢詩には徐々に自己表現の手段といった機能のみが残されるようになった。これは漢詩が日本の禅僧にはもはや染み込んでいたという証拠になるであろう。

漢詩と漢文学だけではなく、絵画、建築、茶の湯等のような日本の文化の要素が禅僧に輸入されて、すでに日本にあった文化的要素と少しずつ合体して、新しい日本の有様を作り出した。ある意味ではこのような現象が日本の歴史の中で何度も起こった。律令国家の誕生、19世紀の開国、戦後の西洋化等と同様なものだと思われる。そのようなことは日本だけで起こったわけではない。各国各時代にグローバル化を導く過程が見られる。世界は20世紀にグローバル化されたのではなく、どのような瞬間にもグローバル化されつつあるのである。

## 参考文献

- Giddens, Anthony. (1991) *The Consequences of Modernity*. Polity Press
- Dumoulin, Heinrich. (1990) *Zen Buddhism: A History: Japan*. Macmillan Publishing Company
- Yamamura, Kozo. (1990) *The Cambridge History of Japan Volume 3: Medieval Japan*. Cambridge University Press
- 岡田正行 (1954) 『日本漢文学史』吉川弘文館
- 中本環 (1976) 『狂雲集・狂雲詩集自戒集』現代思潮社
- 影記秀雄 (1998) 『蕉堅稿全注』清文堂
- 小島 毅 監修, 島尾 新 編 (2014) 『東アジア海域に漕ぎだす4 東アジアのなかの五山文化』東京大学出版会
- 入矢義高 (1990) 『五山文学集 (新日本古典文学大系)』岩波書店
- 山岸徳平 (1966) 『五山文学集・江戸漢詩集 (日本古典文学大系 89)』